

日本語学校に通う留学生の動機づけの要因

一半年間のネットワークの変化から一

飯塚 往子

要 旨

日本語学校に通う留学生の日本語学習への動機づけと、ネットワークの関係を調査した。その結果、チューター、アルバイト先の日本人、クラスメート、同国人の先輩が動機づけに関係していることが分かった。チューターがついたこと、アルバイト先の日本人と仲良くなりたいという気持ち、クラスメートとのいい関係、同国人の先輩がくれる大学の情報、アルバイト先に来る同国人の客の情報などが、肯定的に動機づけに影響していた。その反面、日本人に対するマイナスイメージがすべてに影響している留学生もいた。これらの結果から学校側ができることとして、1. 同国人の先輩とネットワークが作れるような機会を設ける、2. 日本人とのネットワークが作れるようにクラスゲスト、チューター制度を設けるなどが考えられる。

キーワード：動機づけ ネットワーク チューター 同国人の先輩
クラスメート

0. はじめに

同じような勉強をしているのに、学習者同士で差が出るのが少なくない。勉学促進の要因はいわゆる教師や、教科書だけではない。自身の周りのネットワークも大きな影響力を持つ。本稿では日本人とのネットワークや、同国人とのネットワーなどがどのように留学生の動機づけに影響するのか、来日後半年間のネットワークの変化を追うことによって考えたい。本稿は3人の協力者を対象とするケーススタディーであるが、縦断的動機調査を行なうことによって、今後の動機づけに何らかの貢献ができればと考える。

1. 動機づけとネットワークの関係

松下(1999)は「留学の成功の鍵は人間関係のネットワークの構築だ

と云って過言ではない。」と、ネットワークの大切さを述べている。このネットワークと、日本語を勉強する動機づけの関係について、原田（2004）は夜間中学に在籍する3名に調査をし、「日本語に対する強い動機づけがあると、日本語のインプットを求めて、まわりの日本人に積極的に働きかけ、ネットワークに参加するようになる」と述べている。この場合、日本語の動機づけがあることが前提となっているが、ネットワークと動機が関係することが窺われる。田中（2000）が「異文化環境への移行後、新しい対人関係が形成され、対人関係網すなわちソーシャル・ネットワークを形成させていく。」と述べているように、新しい対人関係は一度作られればそれで終わりというものではない。定住外国人女性の日常のネットワークの変化を追った富谷（1997）の報告書でも、約5年半でネットワークが変化したことが報告されている。このことは定住者に限ってのことではなく、留学生のクラスやアルバイト先が変わったりすることで、また新しい対人関係が形成されると考えられる。このことから、ネットワークは変化するものととらえ、この変化がどのように動機に影響するかを考える。本稿では「ネットワーク」を、調査対象者を取り巻く人達とのかかわり、つながりと定義する。

2. 調査対象者

調査対象者は、神奈川県内の日本語学校に通う留学生3名である。

表1 調査対象者

	レベル		出身	性別	国での 日本語学習歴	来日した年月	年齢
	03年後期	04年前期					
H	初級②	中級	中国	男	3ヶ月	2003年9月下旬	23
D	初級①	初中級	中国	男	0ヶ月	2003年9月下旬	21
F	中級	上級	中国	女	6年	2003年11月中旬	24

*レベルは2003年後期、2004年前期のコース開始時である。初級②は初級の後半からのスタートで、年齢は2003年11月調査時のものである。部分は筆者担当クラスである。

3. 調査期間と調査方法

調査は2003年11月、2004年1月、4月の3回実施した。調査対象者は2003年10月生なので、2003年後期から在籍している。この日本語学校は前期4月～9月、後期10月～3月の二学期制である。学期中は

原則としてクラス替えはない。

多くの動機に関する先行研究は質問紙だけを用いて調査だけを行っている。しかし、「学習者自身の自己報告だけでなく、第3者の視点を取り入れた複眼的解釈が、外から見えにくい動機づけの調査・分析には有効である」と文野(1999)にもあるように、ある一つの尺度で測るのは困難だと判断し、多面的に見ることの重要性から4つの調査方法を採用した。

①45項目の質問紙

縫部他(1995)を参考にし、大学院に在学する留学生の意見を取り入れ、日本での縦断調査により適切と思われる内容に作り変えた(添付資料参照)。多くの先行研究では「外発的動機」「内発的動機」に分けて行っていたが、成田(1998)で「外発的か内発的か判断の難しい動機もあり得る」と述べていたことと同様、筆者も分類にやや疑問を感じたので、新しいカテゴリーの分類で行なうことにした。それらは45項目からなり、11のカテゴリー(<将来の展望><経済的要因><日本での生活><日本人との交流・親和><友人に対するライバル心><他者依存的><他人からの評価重視><日本文化への関心><言語及び言語学習への興味><教師に対する関心><学習者同士の交流>)に分かれている。「とてもそう思う」～「全然そう思わない」の5段階評価に丸をしてもらう(なお、とてもそう思うは「1」、全然そう思わないは「5」である)。質問項目はバックトランスレーション法を経た中国語訳がついている。同じ質問紙を使うので、毎回順序を変えて行なった。

②自由記述

日本で生活していて困ったこと、うれしかったこと、悲しかったこと、楽しかったことなどを中国語、または日本語で書いてもらう。調査対象者が自由記述に用いた言語は表2のとおりである。中国語を使用していた場合は、日本語に翻訳したものを分析に使用した。

表2 自由記述に用いた言語

調査対象者	11月	1月	4月
D	中国語	日本語	中国語
F	中国語	日本語	日本語
H	日本語	中国語	日本語

③インタビュー（MDで録音）

質問紙と自由記述で気になった箇所を後日インタビューする。

④第三者インタビュー

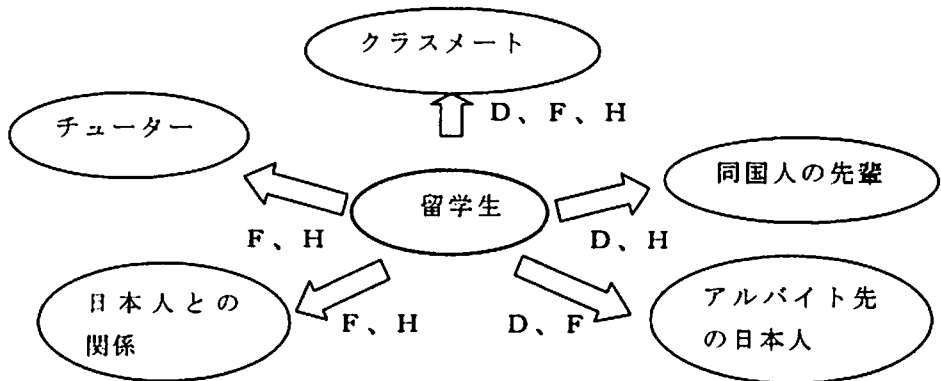
学期の終わりに担当教師に、普段の授業中の学生の様子、クラス開始時から終了時までで、変化したと思われるところ、クラスメートとの関係などをメールにて聞く。

①②は11月、1月、4月、③は1月、4月、④は3月に行った。なお、今回の分析には①の質問紙は補助的に扱い、②③④のデータを中心に進める。

4. 結果と考察

11月から4月までの調査結果で、②の自由記述と③のインタビューの回答の中で、調査対象者のネットワークに関係すると思われる人物として、「チューター」「アルバイト先の日本人」「クラスメート」「同国人の先輩」の4つがあらわれた（図1参照）。また「日本人との関係」という要因もあった。よって以下4.1から4.5では、この5つの視点から結果を考察したい。

図1 留学生と取り巻くネットワーク



4.1 チューター

Fの場合

Fは10月からチューターがついた。授業のわからない点を聞いたり、新聞を読んだりして、自分なりの活用法を身につけ、週1回の活動を楽しみにしている。

Hの場合

Hは1月から欲しがっていたチューターが、4月になりついた。年齢が離れていたため最初はあまりうれしそうではなかったが、年齢が離れているので、話は合わないと判断し、そのかわり日本留学試験の数学を教えることに自分で頼んだという。(インタビューで「チューターさんは物理の専門家だから、頼んだ」と述べている。) F同様、自分なりのチューターの活用法を身につけた。この後、第三者インタビューで、Hが留学試験の勉強を自分で進めている様子をH本人から聞いたという教師がいることが分かった。

横田(1991)は、留学生にとって、寮や奨学金等が整えられることは根本的な満足要因にはならないとし、真に必要なこととして「留学を通して日本や日本人との間に心にのこる深い出会いが体験されることであって、それなくしては留学は本当に満足できるものとはならないであろう。」と述べている。日本語学校に在籍する留学生にとって、大学に在学する留学生よりも日本人の知り合いができることは難しいと思われる。よって、このチューター制度によって、F、Hは日本語を使い日本人と話し、時間を共有することができ、それによって日本語の勉強に対する動機づけになったと考えられる。DはF、Hとは異なり、この半年間でチューターはつかなかった。しかし、1月、4月のインタビューでは、アルバイトがあるため、チューター活動はできないができれば欲しいと、チューターを望んでいた。もしチューターがついていれば、Dの動機づけも、また違った結果になっていたであろう。

4. 2 アルバイト先の日本人

Dの場合

Dは1月に、『他人からの評価重視』の中で、<テレビなどで上手に話す外国人にあこがれている><周りにいる日本人に褒められたい>の項目で「とてもそう思う」の「1」をつけた。インタビューで、アルバイト先で日本人の友達を作りたいが、「(自分の)日本語下手ですから、日本人は(自分のことを)嫌い…、だと思えます。」²⁾と言っていた。Dにとって、日本人の友達を作ることが、日本語の動機につながっているのであろう。第三者インタビューで、「積極的でムードメーカーになっている」「コンスタントに明るい」ということコメントを得ている。

Fの場合

Fは1月に、『他人からの評価重視』の中で<外国人なまりで話すこと>で、損をしたくないが「5」から「3」に変わった。これにはアルバイトの影響が考えられる。<自分の国に帰ったとき、日本人に親切にしてあげたい>という項目の回答が高いのも、日頃アルバイト先で店長さんに親切にしてもらっているからではないかと考えられる（丁寧に説明してもらって申し訳ないとインタビューで述べている）。しかし、うまくいっていたアルバイト先で4月になると変化が起きた。日本語が上手でないばかりに、店長に怒られたという。

DもFも、アルバイト先で、日本人に関係することで嫌な体験をしている。しかしFはアルバイトで起きた嫌な出来事を否定的に捉えるのではなく、逆に肯定的に考え「日本語のやる気」につなげていた（自由記述に「日本語の勉強するやる気ができました」と記入）。ここでこのネットワークから離れることはできたはずだが、Fはアルバイトも辞めずに続けた。Dは、第三者が認める明るい性格で、「日本人に嫌われているかもしれない」と思っている、肯定的に受け入れていると考えられる。問題が起こる原因は「日本人と外国人」という理由だけではない。同国人でも仕事をすれば、問題は起きることがあるはずである。加賀美（1995）が「異文化でのトラブルは文化背景の異なる人間同士が集まれば当然のことで、むしろ自分自身を振り返る好機なのである。」と述べているように、「日本人と外国人だからこの問題が起こる。」とDとFが否定的にとらえなかったことがよかったのだろう。

4. 3 クラスメート

Dの場合

Dの11月の『友人に対するライバル心』の平均値は「1」である。その一方、『学習者同士での交流』も「1」をつけている。友達に負けたくないという気持ちが動機づけになっていたと思われる。しかし、ライバル視している反面、仲間として意識していることも質問紙の結果からわかる。

11月、1月と「クラスメートがいい」と答えていたDは、4月にクラス替えをし、『学習者同士での交流』が下がっている。このことを受けて、インタビューで「前のクラスと今のクラスとどちらが好きですか？」と問うと、「実はね、秘密です。前のクラスが（好きです）。」と述べている。

Fの場合

Fは11月の自由記述で「色々な場所で自分の意志表示をすることがとても困難です。」と述べている。Dとは対照的に、おとなしい性格が窺われる。Fは1月に『学習者同士での交流』が下がっていた。Fが在籍するクラスは活発な学生が多く、まとまっていた。そして、Fは途中から入ってきた学生だった。第三者インタビューで「授業中に質問して答えに窮すると、何もいえなくなってしまう。」と教師が述べているように、多少おとなしい性格であるFがネットワークを拡大させるには、かなりの努力が必要だったと考えられる。

しかしFも4月になると変化した。以前のクラスではあまりなじんでいなかったようだが、現在のクラスは「先生達もいいし、講義もいい。前のクラスより楽しい。」と述べている。Fを取り巻くネットワークの変化により、気持ちも変わったと考えられる。

Hの場合

11月にHもD同様「友達に日本語の勉強で負けたくない」に「1」をつけている。しかしDと異なり、その質問紙の空欄部分に「特に他の国の人には（負けたくない）」と付け加えていた。このような記述をした調査対象者は他にいなかった。またHは1月のインタビューの際、クラスメートとの関係について「まあまあです。」と答えている。インタビュー時の表情は、うまくいっているとは言えないことを示していた。この点を教師側も、「ペアをクラスで自由に作らせるとあぶれてしまう」、「一人で離れた席に座ろうとする」などと認めている。

文野（1999）は「ある情意変数（性格や動機など）をもつ学習者にとって、動機づけに影響を与える外的要因は、学習設備などの物理的な環境よりも、学習者の情意面に影響を与える要因（例えば、ライバルの存在）が強力に作用することが大きな影響をあたえる。」と述べている。Fには見られなかったが、DやHにはこのライバルの存在が動機づけに大きく影響を与えたと言えよう。ただ異なる点があった。Dが友人をただの「ライバル」として見るのではなく、共に勉強する「仲間」として見ていたのに対して、Hは、クラスメートを「ライバル」として考えているのであって、共に勉強をする仲間としては認識していなかった点である。ライバル心が高い点ではDと同じであったが、この点はHとは対照的であった。

Dにとって、初級まではクラスメートが勉強する意思に大きく関係し

ていた。しかし4月になり初中級のレベルになると、クラスが楽しいと感じていなくても、勉強につなげている（この部分に関しては以下「4.4 同国人の先輩」で詳しく考察）。Hも初級ではあるが、初級の後半クラスであった。これらのことから、初級が終わり、中級に差ししかかった頃から、個人での勉強が大きく作用するとも考えられる。

4.2であったように、Fは4月にアルバイト先の日本人と問題を抱えていたが、Fはそれを乗り越えている。その要因として、クラスメートとの関係が良くなったことで、アルバイト先での問題も乗り越えられたと考えられる。横林（2003）が「負の影響要因にもかかわらず、良い人間関係というソーシャル・サポートや当人の適切な対処行動によってアカルチュレーションの過程がゆっくりであるが進んでいたために、「耐えることのできる力」としてのトレランスが獲得された」と述べているように、悪いことがあっても、良いことがあれば、プラスの作用をもたらすと考えられる。また、1つのネットワークは、ある一定の場所だけに作用するのではなく、複雑な人間関係は時には単に厄介なものではなく、いい意味で複雑に作用すると言えるだろう。

4.4 同国人の先輩

Dの場合

Dは4月に「テレビなどで上手に話す外国人にあこがれている」に「1」をつけた。インタビューで、上手に話す外国人を「偉い」と言い、アルバイト先に来る日系企業に勤める中国人のお客さんの日本語を聞いて、「(話を)聞いた(ん)ですが、すごい上手。」と褒めている。アルバイトで疲れているが、必ず毎日1時間勉強するし、もし疲れていないときはもっと勉強するとインタビューで述べていた。

Hの場合

Hは4月のインタビューで、寮の同国人の先輩の話聞いて、「K大学に行きたい」という具体的は目標が決まった。「日本人の友達は大学に行ったらできると思いますよ。」という筆者の投げかけに、「そう思う。クラスは2, 3人くらい中国の留学生がいる。すべて日本人。楽しそう。」と、肯定的に答えていた。また大学生活のことも、詳しく知っていた。このことには、4月からのHの住環境が変わったことが大きく影響している。担当教師が第三者インタビューで「新年度になり久しぶりに（Hに）会ったら、『学生会館に入って同国の先輩もいて良かった。日留試の準備も自分でしている』と明るい表情だった。」と述べて

いた。この同国の先輩が K 大学の大学生で、色々情報をもらううちに、K 大学に入りたいと思うようになったという。4. 5 で述べるが、H は日本人に対して否定的な感情を 1 月より持っていた。4 月になり、まだ残っていたが多少は薄れた。

4 月の D を取り巻くネットワークは、クラスメートのみである。これは 11 月より広がっていない。また、11 月とは異なり、クラスメートとはうまくいっていない。しかし、漠然としてはいるが将来のことが少し決まった。このことは、まだ直接話したことはないが、お店に来るお客さんの影響と考えられる。お客さんは日中企業に勤めている人で、D 自身も将来、中国にある日本企業で働きたいと考えている。将来のことが決まったことが関連して、勉強に対して前向きに取り組むようになったと考えられる。

H も D 同様に、同国人の先輩から情報をもらうことによって、自分自身の目標を明確化した。明確化したことで、日本語の勉強にも熱心に取り組むようになっていく。H に関して、やはり 4. 3 であったように、1 つのネットワークがうまく形成されたことが、他の箇所にもいい影響を与えて、日本人に対する否定的な感情も多少薄らいだと思われる。自分のまわりの関係がよくなったことで、悪いこともあるが、いいこともあると捉えられるようになったのではないかと考えられる。

4. 5 日本人との関係

F の場合

F は 4 月の自由記述に「日本人とのコミュニケーションはまだまだ難しいと思います。」と書いていたのでインタビューの時、理由をたずねると、自分は良い意味で話をしたのに、相手が悪い意味で解釈したことが、数回あったと言う。そのことが原因で、コミュニケーションは難しいと考えていた。

H の場合

H は 11 月の質問紙の〈日本人の友達を作りたい〉に「とてもそう思う」の「1」をつけた。自由記述でも「今大切に（本当に）心配なことは、日本人の友人ができません。」と述べている。D や F の記述には、日本の生活、日本語に関する感想はあったが、日本人の友達を作りたいという記述はなかった。他の 2 人より、日本人の友達が切に欲しい様子が窺われた。

そしてその気持ちは1月になってからも変わっていない。自由記述、「日本に来たあと、現実と自分の考え方の違いが大きいことを発見した。」と述べていた。この背景には日本人の友達がなかなかできないことがあると思われる。このころから、Hの発言には日本批判が表れてきた。自由記述に「日本人と同じように冷たくはなりたくない」と記述している。教師側からも「例文に日本人を否定する考えを書く」といったことが報告された。インタビューの際、筆者の「(アルバイト先で)日本人の友達はできた？」という問いかけに、友達を作ることは難しいと述べている。この日本人に対する否定的な気持ちは、4月になっても自由記述で「日本人は薄情だと思っていたが、付き合ってみると思ったより、冷たい。」と述べるなど、多少残っていた。

モイヤー(1987)は「受け入れ国の文化について学びたいと思っているのにもかかわらず、相手から拒否的な態度をとられれば、もともとどうでもよいと思っていた場合よりも、ストレスの度合いは強いであろう。」と述べている。Hは11月の時点から、切に日本人の友達が欲しかった。しかし、これが現実にはできなかった点で、ストレスは多かったと考えられる。日本人との『親密な関係』は、『日本人の差別的な態度についての認知』と負の方向で関与していることが窺え、好ましく働いていることを示唆している(高井1994)。逆に親密な関係になれない場合、差別的な態度が正の方向で関与していることも考えられる。この「親密になれない」ことがマイナスに作用した結果、日本人のイメージが下がるのであれば、実際に日本人と接触することでこの気持ちは変わると考えられる。Hは自由記述やインタビューでは日本人のイメージを悪く答えていたが、実際筆者が対面して話した印象は、1月の時よりこのマイナスイメージは和らいでいるように思えた。チューターがついたのは4月である。今後、このチューターとのかかわり、アルバイト先の日本人とのかかわりで、大きく変わるといえると思われる。

上級の学習者にアルバイト先や管理人とのトラブルが多い原因として、加賀美(1995)は「まず第一に日本語上級者ほど、日本語習得の限界や問題点を強く認識するのではないかと考えられる。第二に、上級者ほど、日本社会の問題点をメディアから情報として吸収していると考えられるので、言葉の背後にある文化差や日本社会の人間関係のルールの違いを問題として認知しやすいのではないかと考えられる。」と述べている。FやHは、Dと異なり中上級クラスに在籍していた。日本語も上

手なため、日本人とのやり取りが多い分、誤解されることも多かったかもしれない。

5. 結論

5.1 結論

本稿は、ネットワークが留学生の動機づけにどのように影響するのかを明らかにする目的で行った。結果と考察で明らかになったことと、日本語学校に通う学生にとって最終目標となる進学に関連させて表で表すと、以下のようになる。

表3 11月から4月までのネットワークの変化と進学希望先の決定

	チューター	アルバイト先の日本人	クラスメート	同国人の先輩	進学希望先の決定*
D	X→X→X	X→X→X	○→○→△	X→X→△	X→▲
F	○→○→○	X→○→△	X→△→○	X→X→X	●→●
H	X→X→○	X→△→△	△→△→△	X→X→○	▲→●

*進学希望先については、1月のインタビュー時より確認。

*X→つながりがない △→弱いつながりだがいる ○→いる

(進学希望先の決定) X→未定 ▲→具体的ではないが決定

●→具体的に決定

表3の網掛けの部分と、4の結果と考察から、以下のことが言えるだろう。

- ・クラスメートとの関係
- ・日本人からの刺激、勉強以外のことを話せる教師以外の日本人の存在
- ・自分に示唆を与えてくれる同国人の先輩

上記のネットワークが動機に関係することが分かった。最初から目標が定まっていたFは例外だが、D、Hはネットワークが変わったことで、日本語学校に通う学生にとって最終目標となる進学に関連することが、より具体的になったことが窺われる。また、ネットワークが作り上げられるのには、本人の努力の他に学生を取り巻く、クラスメート、住居などの環境という要素も関わることも窺われた。学生の中心的動機(例:目標言語や目標文化に対する学習者自身の価値観)を変えるのは難しいが、周辺の動機(例:教材、教授法、教室環境、教師など言語学習環境に関する動機)は教師の裁量によるところが大きい(三矢2000)。外的

要因である友好的な関係を学生が築けるような環境を、教師が整えることが重要だと言えよう。

高井（1994）が「ソーシャル・サポートの供給源として最も頼られるグループは、まず同国出身者、次に日本人、そして他国出身者の順である。この順位は、調査の時期に関係なく一貫している。」と述べているように、この調査でも、日本人との関係だけではなく、寮の先輩、バイト先に来るお客さんなど同国人との関係も動機づけに影響していることがうかがわれた。留学生自身が、このことに気がついているのだろうか。何かしら教師が介入することも必要だと思われる。

クラスメートとの関係も少なからず影響していた。中高生を対象に調査を行った大久保・長沼・青柳（2003）は「青年期は友人関係の重要性が高まる時期であり、不登校の原因として友人関係上の問題が挙げられることが多いことから、友人関係が学校への適応の問題と最も関連していると考えられる。」と述べている。このことは、日本人学生だけではなく、外国人学生にも当てはまるといえるだろう。しかし、どの学習者にも当てはまることではない。Hのようにクラスメートとの関係がうまくいってなくても、着実に自分のペースで勉強を進めることができる学習者もいる。また、Dのように初級の時は重要であったクラスメートとの関係も、レベルが上がり、重要視しなくなったケースもある。この点はまだ調査が必要だと言える。

Hの日本人に対するイメージとして、まだマイナスイメージが消えたわけではない。Fの今は消えているマイナスイメージも、何かのきっかけで現れる可能性もある。上級になるに連れて日本人の親和性³⁾を厳しく評価する傾向があるという報告もある（岩男・萩原 1988）。よって、上級になるにつれて今まで以上に否定的な感情が多くなる可能性も考えられる。このことをオリエンテーションなどを用いて事前に留学生に知らせておくことも、関連した動機低下を防ぐ有効手段なのではと考える。

5. 2 今後に向けて

以上を踏まえ、教師、学校側ができることとして、以下の2点が考えられる。

1. 先輩からの体験談を聞けるような機会を設ける。出身国が同じでもなかなかクラス以外でネットワークを作るのは難しい。よって、学校側が手助けをしてあげることが必要である。

2. 日本人との交流の機会をより多く設ける。D、Hが述べていたように同国人の先輩とのネットワークを作ること以上に、日本人の友人を作るとは難しい。よって、クラスゲストやを呼んだり、チューター制度を設けたりする必要性が考えられる。この調査を行なった学校はそのような機会に恵まれている。大学では、日本人学生によるチューター、クラスゲストなどの制度もあるが（松下1999）、日本語学校でこのような機会を積極的に取り入れているという話はあまり聞かない。よって、他の学校でもぜひ取り入れることが望ましい。

最後に、教師に対するマイナス要因があまり出てこなかったことに関して述べたい。調査をしている筆者自身が、調査対象者のクラスを担当しており、心的距離は近いが、近すぎるゆえにでてこなかった可能性がある。また本稿は、中国人学習者三名のケーススタディーであるため、他国の学生の場合や、年齢が高い場合に、これらの結果が当てはまるとは一概に言えない。今後もさらなる研究が必要であろう。

今後の課題として、残り半年間のデータ分析を深めたい。

<注>

1) チューターとは、ボランティアで放課後に学習者の支援をしてくれる人である。日本語教育の資格は問わない。日本語の支援のほかにも、行事（クリスマス会や日本語発表会）などにも参加してくださる方もいる。

2) 斜線部は本人の記述、インタビューで述べた形である。なお、わかりにくい点は筆者が括弧内に加筆している。

3) 岩男・萩原（1988）がSD法を用いて対日イメージの調査を行なった際に、「つめたい—あたたかい」「つきあいにくい—つきあいやすい」「親しみにくい—親しみやすい」など対人関係に直結した項目を、親和性と名付けた。

4) 会話の授業の際に、練習相手となる日本語母語話者のこと。

<参考文献>

岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ大学生 社会心理学的分析』
勁草書房

大久保智生・長沼君主・青柳肇（2003）「学習環境における心理的欲求の充足と適応感との関連」『ヒューマンサイエンスリサーチ』
VOL.12 pp21-28

- 加賀美常美代 (1995) 「日本人ホスト側から見た外国人学生のトラブル事例」『日本語と日本語教育』24号 pp.133-152
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ
- 高井次郎 (1994) 「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8号 pp106-116
- 成田高宏 (1998) 「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合—」『世界の日本語教育』8 pp1-10
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」『日本語教育』86号 pp.162-172
- 原田明子 (2004) 「学習環境と社会的ストラテジーの使用—夜間中学に在籍する日本語学習者のネットワークから—」『接触場面の言語管理研究 Vol.3 村岡英裕編 社会文化科学研究費 研究プロジェクト報告書 第104集 千葉大学大学院社会文化科学研究科 pp.151-164
- 文野峯子 (1999) 「学習過程における動機づけの縦断的研究—インタビュー資料の複眼的解釈から明らかになるもの—」『人間と環境—人間環境学研究所研究報告』3 pp35-45
- 松下達彦 (1999) 「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育—教室外環境と教室内環境の融合を目指して—」『留学交流』11(12) pp16-19
- 三矢真由美 (2000) 「能動的な教室活動は学習動機を高めるのか」『日本語教育』103号 pp.1-10
- モイヤ—庸子 (1987) 「心理的ストレスの要因と対処の仕方—在日留学生の場合—」『異文化間教育』1号 pp.81-97
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5号 pp.81-97
- 横林宙世 (2002) 「留学生のアカルチュレーションと異文化間トランス 転機とその後の展開」『異文化間教育』16号 pp32-48

(桜美林大学大学院修士課程)

添付資料：質問項目

将来の展望

1. 日本語ができると、将来何かの役に立つ。
2. 日本の会社で働きたい。
4. 日本の専門学校／大学／大学院に入りたい。
5. 日本語ができると、将来いい事があると思う。
6. 国へ帰ったあと、日本語力が必要だ。

経済的要因

7. 日本語ができると経済的に裕福になれる。
8. 日本語ができると、いいアルバイトができる。

日本での生活

11. 学校を卒業したあとも、日本で生活したい。
32. 日本で生活するのは楽しい。

日本人との交流・親和性

9. 日本人の友達を作りたい。
10. 日本人と結婚したい。
12. 日本人の恋人が欲しい。
25. 日本人が好きだ。
40. 日本語で日本人の友達に手紙やメールを書いたり、電話をしたりしたい。
41. 自分の国に帰ったとき、日本人に親切にしてあげたい。

友人に対するライバル心

13. 友達に日本語の勉強で負けたくない。
14. 友達より日本語が上手になりたい。

他者依存的

15. 親に日本語を勉強するように言われている。
16. 特に理由はないが、友達が勉強しているから自分も勉強している。
17. 勉強しないと先生に怒られる。

他人からの評価重視

18. よい成績をとって、先生や親に褒められたい。
19. 自分の年齢で、母語しか使えないのは恥ずかしい。
20. 日本語ができると、知識のある人だと見られる。
39. テレビなどで上手に話す外国人にあこがれている。
44. 外国人なまりで話すことで、損をしたくない。
45. 周りにいる日本人に褒められたい。

日本文化への関心

- 23. 日本の文化や文学が好きだ。
- 24. 日本の伝統や歴史に興味がある。
- 26. 日本語の漫画や歌、ゲームが好きだ。
- 27. 日本語の小説、雑誌、新聞などが読みたい。
- 28. 日本人の考え方、生活の仕方に興味がある。
- 30. 日本の文化と、自分の文化の違いに興味がある。
- 34. 日本のドラマ、アニメ、映画が好きだ。

言語及び言語学習への興味

- 3. 日本語は国際社会において、大切な言葉だ。
- 21. 外国語を勉強することが好きだ。
- 22. ただ単に日本語が好きだ。
- 29. 日本語と自分の母語の違いに興味がある。
- 31. 日本語の力が伸びると、もっと勉強したくなる。
- 33. アルバイトより、日本語の勉強のほうが大切だ。

教師に対する関心

- 35. 日本語の先生の授業が好きだから。
- 36. 日本語の先生の授業がおもしろいから。
- 37. 授業を教えてくれる日本語の先生が好きだから。
- 38. 先生の教え方が自分にあっているから、勉強したくなる。

学習者同士の交流

- 42. 日本語のクラスの仲間と勉強するのが楽しい。
- 43. 日本語を勉強することで、違う国の友達ができるのは楽しい。